



TITLE:

芙蓉城の出現

AUTHOR(S):

深澤, 一幸

---

CITATION:

深澤, 一幸. 芙蓉城の出現. 人文學報 2002, 86: 225-255

ISSUE DATE:

2002-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48584>

RIGHT:

## 芙蓉城の出現

深 澤 一 幸

### 1

北宋 (960-1126) の中ごろ、都の開封 (いまの河南省開封市) では、不思議なうわさがひろがっていた。その一つは、豪放な詩酒で有名な文人石延年、字は曼卿 (994-1041) の死後に関するもので、北宋の歐陽脩の「六一居士詩話」には、次のごとくのべる。

曼卿が死んでから、その友人でかれを見かけたものがいて、いうには、「まるで夢のように定かでない状況で、かれは『おれは今鬼仙になっている。芙蓉城の主となっている』といい、わたしをさそって共にいこうとしたが、ことわると、忿然として白いラバにまたがり、飛ぶように去った」と。

その後、(友人が) またいうには、「亳州 (いまの安徽省亳縣) の挙子の家に降臨し、また挙子をさそっていこうとしたが、ことわられ、そこで詩一篇を書いてかれに与えた」と。わたしもその詩の一聯がだいたい

鶯声は春光を逐いて老いず  
花影は長に日脚に随いて流る

であったと記憶する。神仙の事は奇怪で不思議なものだ。その詩は曼卿のふだんの言葉そっくりで、挙子には言えないものである。

もう一つは、侍女をもたないという評判のあった質実な政治家丁度 (990-1053) の死に関するもので、北宋の張師正の「括異志」巻七「芙蓉觀の主」には、次のごとくのべる。

慶曆中 (1041-1048)、ある官吏が早朝出仕の途中、大通りに出ると、美女三十人あまりが、化粧し着飾り、二列に馬をならべて前導のごとく行列しているのを見た。突然、丁度が

供をしたがえたづなを引きつつ、美女たちの行列の後について去っていった。官吏はびっくりしていった、「丁度はもともと儉約家なのに、なんとお付きの女性の多いことよ」と。お供で最後尾をゆく者がいたので、官吏は「丁度どのとお身内のかたがたは、いったいどこに遊びに行かれるのですか？」とたずねると、「そうではございません。女御たちは芙蓉館の主となる人を迎えに来たのです。」と答えた。その時、丁度はすでに休暇をとって自宅にいたが、しばらくして、丁が死んだと聞いた。(都官たる辛子言のはなし)

石延年にまつわる芙蓉城、丁度にまつわる芙蓉観、芙蓉館、これらはすべて同一の仙宮を指すと思われるので、以下はすべて芙蓉城と呼ぶことにする、とは、いかなる場所だろうか。おそらく石も丁も死後にそこの主人になったことから明らかなごとく、現世とは隔絶した世界で、ランクの低い鬼仙ではあるが「仙」となったのちに居住する道教色の濃厚な仙宮だろう。丁度を先導した三十人あまりの美女も、そのあたりの消息を示していよう。

また、石延年が死んだのは、仁宗の慶暦元年（1041）、その直後にこのうわさが流れたとすると、丁度のうわさの「慶暦中」とまさしく時期が一致する。そして、のちにのべる王迥のロマンスの発生時期、おそらく慶暦三年（1043）ごろとも、時期が一致するのである。このことは、注意しておく必要がある。

## 2

石延年、丁度のうわさと前後して、さらに大きなうわさの主となったのは、何代にもわたる名門といえる王家の御曹司で美男子との評判の高い王迥<sup>けい</sup>、字は子高、であり、しかもそれは死後ではなくて在世中のことだった。ここでは、芙蓉城のはなしに入る前に、まず王迥にまつわる随筆を紹介しておこう。南宋の趙彦衛の「雲麓漫鈔」巻一〇にはいう。

王迥、字は子高。族弟の子立が蘇黄門（轍）の壻になったので、（子高・子立の）兄弟は、どちらも二蘇（軾・轍の兄弟）とつきあいがあった。子高はのちに荆公（王安石）から学問を受けた。むかし周瓊姫とのロマンスがあり、胡徽（おそらくは徽）之が伝を書いた。あるものはその伝を用いて「六么」曲の歌詞を作り、東坡（蘇軾）はさらに「芙蓉城」詩を作って、そのロマンスを事実だとした。迥はのちに名を遽、字を子開、とあらため、江陰（いまの江蘇省江陰県）に住まいした。わたしは以前江陰に住み、かれの行状を読んだことがあるが、荆公から学問を受けたことはとても詳しく書いてあった。

紹興年間（1131-1162）、その家は東坡兄弟の往来書簡をことごとく収集して人に示した。しかし散失したものも多かったのである。その孫の王寮は母が皇族のむすめだったおかげ

で、高い官職をさずかり、かつて鎮江都統司（いまの江蘇省鎮江市）の機宜（文書係）となつて、手に入れた書簡を都統司で公開した。また「御書の詩を賜わりしを謝す」る詩の「繡裳画袞 雲は地に垂る」の句の書があり、表とともに絹地、朱野に書いてあった。こんなにも珍重していたのである。（しかし）機宜公（寮）の外祖父たる齊安郡王の趙士儂が、それを持ち去って高宗の長寿の祝い物とした。今は禁中にある。

ここでは、王迴が蘇軾・蘇轍の兄弟、そして王安石と深い関係があったことに注意すべきである。これら北宋を代表する文人がかれのうわさを広めることにかかなりの役割をはたしているからである。そのうわさとは、つまり「周瓊姫とのロマンス」である。

なお、「繡裳画袞」の句は、「九月十五日邇英に論語を講じて篇を終う。……又中使を遣わして就きて御書の詩各一首を賜う。軾は紫薇花の絶句を得たり。……翌日各おの表を以て謝し、又詩一篇を進む。臣軾の詩に云う」という長題を付した、元祐二年に蘇軾が哲宗にささげた七言古詩の冒頭の一句である。おそらく、蘇軾が直接王迴のために書いて与えたものだろう。

さらには、南宋の王明清の「玉照新志」巻一にいう。

王子高が芙蓉城の仙女に遇ったロマンスは、世間のだれもが知っている。子高は初めは迴という名だったが、のちにその話が国中にひろまったので、名を蓬とあらため、字を子開とかえた。蘇軾・黄庭堅ととても親しくつきあっていたことは、尺牘に明らかである。東坡先生はまた「芙蓉城」詩を作った。

話によると、別れの時、芙蓉の仙女は神丹一粒をくれ、「悲しまないでください。将来はきっと澄江のほとりで二人仲よく年老いることになるでしょう。」と告げた。その時は意味がさっぱりわからなかった。子開はその時十八九歳で、しばらくして向氏と結婚し、十年で死別してやもめとなり、四十歳で江陰の豪族のむすめと再婚した。ちょうど二十歳だった。婚礼ののち、新妻をみると、目もと口もと愛らしく、姿なまめかしく、背たけもほどよく、以前に出遇った仙女と寸分のちがいもなかった。以前に告げられた言葉を問いただすと、ぼんやりして何もわからぬようだった。しかし澄江とは、江陰の里の名だったのである。子開はこれをきっかけに澄江の人となった。あの神丹を服用したおかげで、八十歳を過ぎても、健康で病気もなかった。

わたしは壬午の年（1162、紹興三十二年）、<sup>しやうと</sup>外舅が淮南西路の経略安撫使になったのにつき従った。子開の孫の（王）明之も観察として幕府（廬州、いまの安徽省合肥市）におり、仲よくつきあっていたが、いつも以上のような事柄を語ってくれた。このロマンスは、「雲谿友議」にのせる玉簫のロマンスとよく似ている。

子開は趙州（いまの河北省趙県）の人で、忠穆公王巖の孫、眞部員外郎王正路の子、出仕

して中散大夫にまで昇進した。晩年は濡須（いまの安徽省巢県あたり。無為軍をいうかもしれない。）の守となり、祠堂はそこにある。賀方回（鑄）が子開のために作った挽詩には、

我れ昔し房子（臨城、いまの河北省臨城県）に官たりて

嘗つて忠穆（王履）の賢なるを聞く

といい、また

和璧は終に趙に帰り

干将は呉に葬られず

ともいう。今は秦少游（観）の集中に収められている。明之の子はすなわち和寧である。少游は元符の末（1100）に亡くなり、子開は大観中（1107-1110）まだ健在だった。誤って収められたことは明らかである。

王明清が似ているとして言及した「玉簫」のことは、唐の范攄の「雲溪友議」巻三にみえる。そのあらましは、高官の韋臯が江夏の姜荊宝の侍女玉簫と知りあい、別れぎわに、七年たったらここにもどって結婚すると約束するが、七年たってももどらず、玉簫は病いで死んでしまう。のち韋臯は、少翁の術を知る祖山人の霊力をかりて、玉簫と瓜二つの歌妓とめぐりあう、といったものである。ただ、この玉簫は、芙蓉城のような仙境とのかかわりを全く示していない。

また、江陰の豪族のむすめとの再婚は、李燾の編んだ「統資治通鑑長編」巻四七一、哲宗の元祐七年（1092）三月の条に、その反映がみられる。右朝請郎だった王蘧、つまり王迥を秀州（いまの浙江省嘉興市）の知事に任命することに言官たちは反対するが、まず御史中丞の鄭雍は次のごとくいう、

蘧は江陰県の豪民と親を為し、其の資材に就きて、名節を顧みず。今無名にして擢げて浙西の名郡を領せしむ。使し一路のもの之を觀れば、朝命を輕笑せん。

殿中侍御史の呉立礼はいう、

蘧の人と為<sup>な</sup>りは、尤も汚下と為す。常州江陰県に孀婦有り。家は財に富み、巨万に止どまらず。蘧は高費を利とし、身を屈して贅<sup>いりむこ</sup>壻と為る。貪汚なること此こに至れり。素より士論の薄<sup>うと</sup>んずる所と為る。

殿中侍御史の楊畏はいう、

蘧は嘗<sup>か</sup>つて大姓の女の資材巨万なるを利とし、娶<sup>めと</sup>り以って妻と為すも、贅<sup>いりむこ</sup>に異なる無し。

未まだ他の長を聞かざるに、便ち此の恩を被るは、亦た故無きに似たり。

これらの痛烈な反対によって、王蘧は秀州への任命を取り消され、無為軍（いまの安徽省無為県。さきの濡須をいうだろう。）の知事となったのである。言官たちによれば、江陰の女は「孀婦」未亡人であり、王蘧はその「贅壻」入りむこ、当時はきわめていやしむべきものとされた、になったようだが、あるいは実状だったかもしれない。

また、賀鑄の挽詩は、たしかに秦觀の「淮海後集」巻三に「王子開を悼む五首」として収められ、さきに引かれた句は、それぞれ第一首、第五首にある。しかし、この収録の誤りについては、南宋の陸游の「老学庵筆記」巻五にも、次のごとくのべる、

賀方回の作たる「王子開挽詞」の「和璧は終に趙に帰し、干将は呉に葬られず」の句は、秦少游の集中に見える。子開は大觀己丑（三年、1109）に（いにしえの呉の地たる）江陰で亡くなり、（趙州のそばの）臨城にもどして葬られた。だから方回のこの句がすぐれるのである。その時少游はすでに没してより十年たっていた。

この記述によって、王迥、のちの王蘧の没年は大觀三年（1109）とわかる。芙蓉仙女とのロマンスは、後述する資料により、北宋の慶曆三年（1043）ごろとすれば、「十八九歳」のときなのだから、その生年は、仁宗の天聖三年（1025）あたりと推定して大きく誤らないだろう。天聖三年から大觀三年までは八十四年、八十歳あまりに相当しよう。

3

それでは、王迥と、さきに「周瓊姫」とされた芙蓉城の仙女とのロマンスをのべることにしよう。その事がおこったのは、慶曆三年ごろとさきに推定したが、それはうわさとしてすぐに世間にひろまり、「雲麓漫鈔」に「胡徽之が伝を書いた」というごとく、まず胡徽之なる者が「王迥子高芙蓉城伝」なる伝奇小説をまとめた。この「伝」は現存していないが、その断片は幸いにも蘇軾の「芙蓉城」詩の南宋につけられた注のなかに残っている。南宋版「東坡先生詩」巻一四の施元之・顧景蕃の注と、南宋の王十朋がまとめた「集注分類東坡詩」巻四にひく諸家の注である。この両注、いわゆる施注と王注をつかって、清の邵長蘅が施注を整理したついでにこの伝を復元しようと試みたことがあり、それは「王子高芙蓉城伝略」なる題で、清の馮応榴の「合注」などに収録されている。いまは、これらを参考にしつつ、できるかぎり、本来の胡徽之の「伝」を復元することにしたい。以下は、叙述の区切りにあわせて区切り、それぞれ根拠にした注を提示する。

(1) 王は初め周に会ったとき、小走りして彼女を避け、おそろしくて寝る気にならなかった。夜がふけてとても眠くなり、窓やドアをみると閉まったままひっそりしていた。そこで内に入って衣服を脱いだとたん、ベッドのとばりのあたりであえぎ声がするのを聴きつけた。なんとさっきの女性がすでに衣服を脱いで横たわっていたのである。——蘇軾「芙蓉城」詩第18句の施注。

(2) 周が王に語っているには、「わたくしはこの俗世において、嗜欲がまだ尽きておりません。前世の契りによって、あなたさまにお仕えせねばなりません。それでお尋ねしたのです。一朝一夕の定めではありません。」と。——第11句の施注。

(3) 夜が明けると、周はもう去っていたが、ふとんやら枕には、残り香がまだただよっていた。——第12句の施注。

(4) 初め、(王迥が)あるむすめに出遇ったとき、自から周大尉のむすめだと告げた。——第1句の施注。

(5) これ以来、朝に去っては夕べにやってくるのが、百日あまりつづいた。——第18句の施注。

(6) ある日、周は王に告げた、「もうすぐ朝列に参加します。」王はいった、「朝列って何のこと？」(周は) 答えていった、「帝にお目通りするのです」。その詳細は語らなかった。彼女はこのために突然去ってより、数日間やって来なかった。——第13句の王注により、第13・18句の施注を参照。

(7) 突然ある夕べ、夢で周が道服を着てやって来て、王にいった、「わたくしは奥深い片田舎に住んでおります。あなたいらっしゃいませんか。」そこで喜んで彼女に従った。ただおのれの身体がフワリと軽くなり、周とともに舞い上がったと感じ、たちまち一つの嶺を飛び過ぎた。ある宮殿に到着したが、まるで俗世の王者の住居のよう。ある門にやってくると、珍禽佳木、清流怪石、殿閣は金碧がたがいに照りはえている。そこで(周は) 王と東廂の門から入り、廻廊を通してある殿廷にやって来たが、はなはだ雄壮である。下方には三つの楼がたがいに向かいあってそびえ、これまた雄麗である。廊間にある門の一つが半ば開いており、周は突然入っていった。王はしばらくそこで待った。すぐさま、周は一人の女性とともにやって来た。周はいった、「三山の事はすっかりわかったの？」(女性)はいった、「すっかりわかったけど、情をどうすることもできないのよ。」そこで手をパチリと打つと去っていった。東廊の門のあたりで行きつもどりつしていると、門がひらき、女人の道服を着て出てくるものが百人あまり、殿前の広場に立った。まもなく、殿上の御簾が巻きあげられ、美男子がひとり朝服を着て(玉の) ひじかけによりかかっていた。そして広場の女たちは順番に一人ずつ殿上にあがっていった。しばらくして、ひじかけによりかかっていた男は立ちあがり、御簾はまた下ろされた。女人たちのすがたもまた見えなくなった。周はそこで王に命じて東廂の楼に登らせた。——

「叙」の王注により、第1・4・20句の施注を参照。

(8) 楼上には酒器がととのえてあり、欄干にもたれて存分にながめれば、清秀な山川が眼下にひろがる。うつぱりには扁額がかかっており、「碧雲」と書いてある。王がまだ下りないうちに、一人の女性がこの楼に登ってきた。年は十五ばかり、すがたはあでやかでなまめかしく、これまた周同様の美女である。周は王にいった、「この子は芳卿です。わたくしと一番仲がいいんです。」——第27句の王注により、第23句の王注・施注を参照。

(9) 夢をみた翌日、周がやって来た。王は夢の内容を告げた。周は笑っていった、「芳卿の気持ちは、とても懇ろなのね。」王はたずねた、「いったいどこだったんだい？」周はいった、「芙蓉城です。」たずねた、「ひじかけによりかかっていたのはだれ？三山の事って何？」周はどちらも答えなかった。王は周にたずねた、「芳卿は何という姓だい？」答えて、「わたくしと同じ（周）です。あなたこの事に感動したなら詩をお作りください。」（王は詩を作って）周に贈った。——「叙」の王注により、第27句の施注を参照。

(10) 周は別れにのぞんで詩をのこした、その詩とは、

久しく<sup>ベッド・カーテン</sup>屏 幃を事として暫らくも閑ならず

今朝<sup>わかれのきもち</sup>離<sup>らんさん</sup>意は尚お蘭珊たり

行くに臨んで<sup>た</sup>惟だ相思の涙有り

<sup>したた</sup>滴りて羅衣に在り 一半<sup>まだら</sup>斑なり ——第29句の施注により、第29句の王注を参照。

(11) 虞部員外郎の父君（王正路）はその事を「状」にまとめて皇帝に上奏した。（その後王廻は）春の花をみても秋の月をながめても、もの悲しく涙を流してその場を去るのだった。——第30句の施注。

以上が、現在残っている胡微之の「伝」の内容である。なお、「伝」の(11)の王正路の上奏を補足するものとして、さきの王明清の父で、北宋末南宋初の王銍の「默記」巻上に次のごとき話を伝える。

世間に伝わる王廻が女仙の周瑤英に出遇ったロマンスについて、事実でない、寄託したつくりばなしだと言うものもいるが、実はそうではない。この当時、天下にすっかり知れわたり、禁中でも知っていた。この時、皇子がしばしば早死にしていた。晏殊（991-1055）どのが宰相で、ある日、人をつかわして廻の父の郎官王璐（おそらく正路）を私第にまねき、親密に時を過ごしていたが、王璐はかれの意を測りかねていた。すると突然（晏殊が）たずねた、「御子息は仙女と遊ばれ、その仙女は天帝の宮廷に仕えているとのことだが、本当か？」王璐はびっくりして、どう答えていいかわからずおもむろにいった、「息子は心を病んで、妖鬼にとりつかれてしまいました。家中の害をなすこと、述べつくせぬほど



でございます。」晏殊はいった、「かくすことはない。いつも御子息と未来の事を語るたびに、その通りになるのではないかな？」王璐は答えていった、「時にはその通りになることがございますが、これまで（息子に）問いただしたことはございません。」晏殊はいった、「これは上旨じゃ。お上はわたしにそなたを呼んでひそかにお願いするようお願いされた。どうも皇子たちがしばしば早死にするので、御心を深く痛めておられるようじゃ。ひとつためしに天帝の宮廷で、皇子がいつ生まれるか、この後皇太子がきまるかどうか、たずねてもらいたい。」王璐はいった、「かしこまりました。」数日後にやって来ていうには、「ひそかに言いつけて息子にたずねさせましたところ、息子がいいますには、『かの仙女はみずから九天に上り、簿籍を主管する者に会ったところ、聖上がもし同族のかたを世継ぎとされたら、その御世はながく続くだろう、皇子の誕生の目途はたたない、と言った、とのこと。』かれはこういうふうに言いましたが、どうか宰相どの、お信じなさるぬよう、家門をお守りください。」晏殊は黙ったままだった。そののち（仁宗に）上奏するときも、すべてを告げることはしなかった。富弼どのは晏殊のむこである。富どのが宰相になったときも、皇子はまだ生まれていなかった。だから文彦博どの、劉丞相（摯）、王堯臣どのといっしょに、はじめて世継ぎ（のちの英宗）をお決めになるよう進言したのは、おもうにこのことに起因するのだろう。

近人の夏承燾氏の「唐宋詞人年譜」（上海古籍出版社、1979）に収める「二晏年譜」では、慶暦三年（1043）五十三歳の条に、一月の仁宗の第三子荆王趙曠の長子・次子早死につづく死をあげて、この「默記」巻上の記載をひき、「默記の記述は、きっと本年の荆王がなくなった後の事だろう」とコメントしている。それは、晏殊が宰相をつとめた慶暦三年三月からその翌四年九月までの時期にもびったりあう。さすれば、王廻と仙女のロマンスの発生も、この慶暦三年ごろのこととして、まず間違いあるまい。

ここで胡微之の「伝」以外の、同じ王廻の故事をあつかった書についてのべておく。その一つは著者のわからぬ「賢異録」なる書で、南宋の陳振孫の「直齋書録解題」巻一一にはいう、

賢異録一卷 亦た無名氏。記する所は四事。其の一に「鬼伝」と曰う者は、王禪家の子弟の遇う所を言い、世に伝う王子高の事と大同小異にして、当に是れ一事なるべき耳。<sup>のみ</sup>

「王禪家の子弟」とは、まさしく王禪の孫たる王廻「王子高」に他ならない。

また、南宋の皇都風月主人があつめて講釈師の参考に供したらしい「緑窗新話」巻上に収める「王子高 芙蓉仙に遇う」は、基本的には胡微之の「伝」を節録したものといえようが、

「伝」の（１）から（６）にあたるその前半には、「伝」を補足する記述がある。参考のために、いまあげておく。

王君迴，字は子高。その家では女性の客を招いた。夕べとなり，酒もおわって，ふと一人の女性がりっぱな冠をかぶりきらびやかな服をきて，座敷の西に坐っているのを見た。王は怪しんでたずねると，「しばらくしたらあなたの寝所にまいります」と答えた。王は恐れ，寝る気になれなかった。（それでも）とても眠くなって寝ようすると，突然だれかがベッドの帳とばりの中からかれの衣を引っぱった。それはさきほど会った女で，すでに衣を脱ぎ，寝ようとしていた。王は恐れ，逃げようとした。女はいった，「わたくしは前世の契りによって，あなたさまにお仕えせねばなりません。」そこで交わることをせまったが，王は恐れて承知しなかった。夜が明けて，女は去った。三日後に，またやって来て，王は女と交わった。（そこで）女に何家の人間かたずねると，女はいった，「わたくしは周大尉のむすめで，名前は瓊姫と申します。」これ以来，朝に去っては暮にやって来た。ある日，葉を出して王にのませ，また詩をおくっていうには，

陰魄陽精を宝煉して成りしもの  
之を服せば一日にして長生す可し  
芙蓉闕下には仙侶多し  
人間の利と名とを羨むを休めよ

このあとに，夢中での芙蓉城訪問がつづくわけだが，いまあげた「新話」の前半の，残存する「伝」に見えない部分は，おそらく本来の「伝」の記述をそのまま伝えているとしてよいだろう。

4

つぎは，さきの「雲麓漫鈔」に「あるものはその伝を用いて「六么」曲の歌詞を作り」とあった「六么」を考えてみよう。南宋の王灼の「碧雞漫志」巻三などによれば，「六么」とは唐の教坊の大曲，つまり歌・舞・器楽が一体となった歌曲の一つで，宋代には「詞」のメロディーとしても用いられた。「緑腰」「樂世」「録要」ともいう。この調は，一拍が六字を過ぎるものがない，つまりリズムが急だから，六么という。宋代に流行していた四種は，すべて羽調。その歌詞は，双調九十四字で，前後各段九句，仄韻である。

これによれば，「漫鈔」のことばは，だれかが胡の「伝」にもとづいて芙蓉城のロマンスを，「六么」曲のメロディーにのる歌，そのかたちは「詞」，に仕立てあげたのだと理解できる。こ

の「六ム」の一句を書きとどめた随筆として、北宋末の朱彧の「萍州可談」巻一の一節をあげよう。

官吏の王迥は姿かたちが美しく、才能もあったが、わかいころはあまり素行に注意せず、よこしまな連中にあざむかれ、はやりうたに歌いこまれたりした。いまの「六ム」で歌われる「奇俊王家郎」（奇俊なり王家の郎）こそ、迥なのである。元豊中（1078-1085）、蔡確が監司に適任ですと迥を推薦したが、神宗はとつぜんいった、「この者は奇俊王家郎のかれではないのか」。蔡確は叩頭し謝罪した。

この話のヴァリエーションとでもいえるものが、北宋の張舜民の「画墁録」にのっている。それには、いう。

或ものが王迥を荆公（王安石）に推薦した。介甫（王安石）は、はいはいと返事し、そのあといった、「奇俊をどうすればいいんだ？」。客は理解できなかった。或ものがわらっていった、「これは介甫のユーモアだよ」。王迥、字は子高、仙女に出遇ったことがある。「六ム」に「奇俊なり王家の郎」とうたっている。

さらに、二句が蘇軾の「芙蓉城」詩の王注に残っている。一つは、第20句の王注に趙次公の説として、

而して其の事は則ち曲中に所謂る「夢中共跨青鸞翼」（夢中共に跨る青鸞の翼）なり。

とあり、もう一つは第23句の王注にやはり趙次公の説として、

玉楼亭亭とは、則ち曲中に所謂る「一簇楼台」（一簇の楼台）なり。

とある。この断片的な記述によって、ともかく「六ム」の歌詞は全十八句のうち「奇俊王家郎」「夢中共跨青鸞翼」「一簇楼台」の三句をうかがうことができる。

芙蓉城をのべたこの「六ム」の大曲が、南宋でまだ唱われていたことは、さきの王注の引用以外にも、四水潜夫の輯になる「武林旧事」巻一〇の「官本雜劇段数」に

王子高六ム

をあげていることからわかる。そして、元代になっても歌曲として唱われていたことは、元末明初の陶宗儀の「南村輟耕録」巻二五「院本名目」の「諸雜大小院本」に

鬧芙蓉城（芙蓉城を鬧<sup>さわ</sup>がす）

をあげており、また同じく元末明初の長谷真逸の「農田餘話」巻上に、

以前、白描の「王子高 周瓊英<sup>あ</sup>に会う」一巻をみたが、内に古曲若干段があり、近ごろの歌曲の名前ではなかった。四十大曲の一つだろうとおもった。のちに大曲の譜をみるとぴったり合い、「紅葉に詩を題す」「崔鶯（鶯）」などの曲もみな入っていた。いまの人はその音節<sup>おとふし</sup>を理解できないのだ。

とある。「六幺」の後代における継承を示していよう。

5

胡の「伝」、無名氏の「六幺」がひろまったのちに登場し、このロマンスの普及に決定的な影響を与えたのは、北宋の最高の文人蘇軾（1036-1101）である。「漫鈔」に「東坡はさらに芙蓉城詩をつくって、そのロマンスを事実だとした」というごとく、かれは、当時流布していた王迥と周瑤英のはなしに、直接王迥本人から聞いた内容を加えて「芙蓉城」の長詩をかきあげた。そのことは、詩の「叙」にくわしい。

世に伝う、王迥子高は仙人周瑤英と芙蓉城に遊ぶと。元豊元年（1078）三月、余れ始めて子高<sup>し</sup>を識<sup>し</sup>る。之<sup>これ</sup>（ロマンスのこと）を問えば信<sup>まこと</sup>に然り。乃ち此の詩を作り、其の情を極めて之を正に帰す。亦た「変風 礼義に止まる」の意なり。

元豊元年といえ、蘇軾は四十三歳、徐州知事の任にあった。ロマンスの発生からはすでに三十年あまりたっており、王迥も四十歳で再婚したとすれば、すでに仙女と生きうつしの江陰の豪族のむすめと夫婦生活をいとなんでいたはずである。

ここで蘇軾兄弟と王迥兄弟との密接な親戚関係を示すものとして、蘇軾が若くして亡くなった王迥の弟王適のために書いた「王子立墓誌銘」（「東坡後集」巻一八）から、関連する部分を引こう。

子立、諱は適、趙郡臨城の人である。はじめ、わたしが徐州知事だったとき、子立は州の学生だった。(わたしは)かれが賢くて文才があり、喜怒をあらわさず、得失を同様にみなすことを知って、「子由(蘇轍)に似ている人間だ」といい、子由のむすめをかれの妻とした。かれは弟の王適、字は子敏、とともに、呉興でわたしにしたがっ(て勉強し)た。……(子立は)元祐四年(1089)の冬、都から済南にいかうとして、途中、奉高の伝舎で亡くなった。十月二十五日だったろう。享年三十五。曾祖は諱は璘、中書令を贈られた。祖は𣪠、工部侍郎、知枢密院で、大尉を贈られ、忠穆と諡<sup>おくりな</sup>された。考は諱は正路、比部郎中、知濮州で、光祿大夫を贈られた。…七年十一月五日、その兄の蘧、字は子開が、臨城竜門郷両口村の先祖の墓所のかたわらに葬った。

これによれば、蘇軾が王適・王適の兄弟と知りあったのも徐州知事のときであり、おそらく兄の王迥と同時の元豊元年のことだったろう。

さて、こうした背景を考慮しつつ、いよいよ「芙蓉城」の詩そのものを読んでいくことにしよう。

- |   |         |  |
|---|---------|--|
| 1 | 芙蓉城中花冥冥 | 芙蓉城中 花冥冥たり   |
| 2 | 誰其主者石與丁 | 誰か其れ主たる者ぞ 石と丁と   |
| 3 | 珠簾玉案翡翠屏 | 珠簾 玉案 翡翠の屏   |
| 4 | 雲舒霞卷千傳停 | 雲 <sup>の</sup> 舒び霞 <sup>の</sup> 卷く 千 <sup>へいてい</sup> の傳停 |

「石」は石延年、「丁」は丁度である。「珠簾玉案」は、「伝」の(7)の殿上の御簾と美男子の評定と、「千の傳停」たる美女は、同じく(7)の百人あまりの美女と、ひびきあっていよう。以上の四句は、芙蓉城の描写。つづいては、周瑤英のことをのべる。

- |   |         |                 |
|---|---------|-----------------|
| 5 | 中有一人長眉青 | 中に一人 長眉の青き有り    |
| 6 | 炯如微雲澹疎星 | 炯として微雲に疎星澹たるが如し |
| 7 | 往來三世空鍊形 | 往來 三世 空しく形を鍊る   |
| 8 | 竟坐誤讀黃庭經 | 竟に誤って黄庭經を読むに坐す  |

ここは、「伝」の(2)にいう俗世とのしがらみを、道教の聖典「黄庭經」の誤読によって俗世に流されたと、より具体的にのべている。つぎには、周瑤英の王迥のもとへの訪れと、しばしの天上界への帰還をうたう。

芙蓉城の出現（深澤）

- |    |         |                                  |
|----|---------|----------------------------------|
| 9  | 天門夜開飛爽靈 | 天門 夜開いて爽靈飛ぶ                      |
| 10 | 無復白日乘雲駟 | 復た白日に雲駟に乗る無し                     |
| 11 | 俗縁千劫磨不盡 | 俗縁 千劫 磨すれども尽きず                   |
| 12 | 翠被冷落淒餘馨 | 翠被冷落して余馨淒たり                      |
| 13 | 因過緱山朝帝廷 | 緱山を過ぎて帝廷に朝するに因って                 |
| 14 | 夜聞笙簫弭節聽 | 夜笙簫を聞いて節を弭 <sup>とど</sup> めて聴く    |
| 15 | 飄然而來誰使令 | 飄然として来る 誰か使令する                   |
| 16 | 皎如明月入窗櫺 | 皎として明月の窗櫺 <sup>そうれい</sup> に入るが如し |
| 17 | 忽然而去不可執 | 忽然として去る 執らう可からず                  |
| 18 | 寒衾虛幌風泠泠 | 寒衾 虚幌 風泠泠たり                      |

ここは、ほぼ「伝」の（１）（２）（３）（５）（６）に対応する。注目すべきは、第 13・14 句において、周仙女が緱山を飛びすぎて天帝の宮廷に参上する途中、夜、王迥の吹く笙簫の音色を聞きつけ、車をとめて聴きいった、とのべることである。この二句によって、周がなぜ王迥のもとに降臨したかという、そのきっかけが明らかになる。つづいては、このロマンスの中心となる、「夢中」での王迥の、周瑤英にともなわれての芙蓉城訪問をうたう。

- |    |         |   |
|----|---------|---|
| 19 | 仙宮洞房本不局 | 仙宮 洞房 <sup>もと</sup> 本もと <sup>と</sup> 局ざさず                     |
| 20 | 夢中同躡鳳皇翎 | 夢中 同じく鳳皇の翎 <sup>つばき</sup> を躡 <sup>ふ</sup> む                   |
| 21 | 徑度萬里如奔霆 | <sup>ただ</sup> 徑ちに <sup>わた</sup> 万里を <sup>いなづま</sup> 度ること奔霆の如し |
| 22 | 玉樓浮空聳亭亭 | 玉樓は空に浮かんで聳 <sup>そび</sup> えて亭亭たり                               |
| 23 | 天書雲篆誰所銘 | 天書 雲篆 誰か銘する所ぞ   |
| 24 | 遶樓飛步高鈴屨 | 樓を遶 <sup>めぐ</sup> りて飛歩すれば高くして鈴屨たり                             |
| 25 | 仙風鏘然韻流鈴 | 仙風鏘然として流鈴 <sup>ひび</sup> 韻く                                    |
| 26 | 蘼蘼形開如酒醒 | 蘼蘼として形開いて酒の醒 <sup>む</sup> むるが如し                               |
| 27 | 芳卿寄謝空丁寧 | 芳卿寄謝して空しく丁寧 <sup>むな</sup> たり                                  |
| 28 | 一朝覆水不返餅 | 一朝 覆水 <sup>へい</sup> 餅に返らず                                     |
| 29 | 羅巾別淚空熒熒 | 羅巾 別淚 空しく熒熒たり   |

ここは、ほぼ「伝」の（７）（８）（９）（10）にあたる。ただ、第 27 句の、芳卿がくりかえし懇ろにことづけてくれた言葉も、今はすっかり空しくなった、という内容は、「伝」からだけではよくわからない。そして最後は、周仙女と別れたあとの王迥の気持ちを思いやる。

- |    |         |   |
|----|---------|---|
| 30 | 春風花開秋葉零 | 春風に花開いて秋葉 <sup>お</sup> 零つ                     |
| 31 | 世間羅綺紛臙脰 | 世間の羅綺は紛として臙脰たり                                |
| 32 | 此生流浪随滄溟 | 此の生は流浪して滄溟に随い                                 |
| 33 | 偶然相值兩浮萍 | 偶然として相い <sup>あ</sup> 値う 両浮萍                   |
| 34 | 願君収視觀三庭 | 願わくは君 視を収めて三庭を觀ぜよ                             |
| 35 | 勿與嘉穀生蝗螟 | 嘉穀 <sup>ため</sup> の <sup>な</sup> 与に蝗螟を生ずること勿かれ |
| 36 | 從渠一念三千齡 | 從 <sup>まか</sup> す 渠 <sup>かれ</sup> が一念三千齡にして   |
| 37 | 下作人間尹與邢 | 下って人間の尹（夫人）と邢（夫人）と <sup>な</sup> 作るに           |

ここは、「伝」の(11)と少し関係する。この蘇軾のうたいぶりでは、王迥は周仙女と別れたのち、ずっと気分が落ちこんでいたようだが、それでは江陰の豪族のむすめとの結婚がどういう具合であったのか、よくわからないところである。やはり、むすめは未亡人で、かれは入り婿だったのかもしれない。

それはともかく、蘇軾の「芙蓉城」詩が発表されると、王迥の学問上の師である王安石(1021-1086)が和詩を作って応じた。北宋末南宋初の葉夢得の「避暑録話」巻上にはいう。

世に伝わる王迥が芙蓉城の鬼仙と遇ったロマンスについて、ある者は、ありはしない、という。おもうに何かにかこつけた話なのだろう。迥、字は子高。蘇子瞻(軾)は迥と姻戚なので、この話を歌(「芙蓉城」詩)に仕立ててやった。人びとはそこで本当のことだと思いきんだ。兪澹、字は清老、がいうには、「王荊公(安石)どのはかつて子瞻の歌に和され、わたしの兄(兪)紫芝のために朗誦してくださいとたのんだが、荊公どのは、『これは戯れの作にすぎぬ、人には見せられぬ』といわれた。こういうわけで世間には伝わっていないが、まだその和詩の冒頭が

神仙出沒して杳冥<sup>かく</sup>に蔵れ

帝は万鬼を遣わして六丁を駆らしむ

であったことはおぼえている。」と。

わたしが許昌(いまの河南省許昌市)にいた時、韓宗武と会ったことがある。坐客のなかに「宗武は二十歳あまりのとき、王子高と同様の体験をした」というものがいた。このとき宗武は八十歳あまりであった。わたしが問いただすと、宗武は笑うばかりで答えようとしなかった。するとその客は(宗武が)仙女とやりとりした詩数十篇を朗誦したが、すべて五言の古詩、清楚愛すべく、「玉台新詠」の艶詩のようである。宗武はわたしが気に入ったのを見ると、笑っていった、「荊公どのもかつてとてもお褒めになり、『近ごろの人間ではない。きっと(六朝の)齊、梁のころの鬼仙だろう』とおっしゃっていた。」そこで

ざっと事の一部始終をかたるには、「この仙女と二年近くつきあったが、べつにつらいと思ったことはなく、ただ夢うつつの気分で、食事も取ったり取らなかったりといった具合だった。のちに国医（翰林医官だった）の陳易簡先生の指示で、蘇合香の丸薬を服用すること半年あまり、突然ある日仙女があらわれなくなった。薬が効いたせいなのかどうかはわからない。」と。

前半の兪澹がかたった王安石の和詩については、南宋の呉曾の「能改齋漫録」巻一八「石曼卿・丁度は芙蓉城主と為る」の条に、韓駒のことばとして、同様の話をつたえる。

韓子蒼がいった、「王荊公はかつて東坡のこの詩に和したが、自分の集にはのせていない。ただそのなかの二句が『神仙出沒して杳冥に蔵れ、帝は万鬼を遣わして六丁を驅らしむ』とあったことだけはおぼえている」と。

後半で言及される韓宗武は、天禧三年（1019）の生まれで慶暦二年（1042）に進士に及第し政府の高官を歴任した韓縝の次子であり、河間の令、秘書丞、都官員外郎、淮南転運判官などを歴任して、八十二歳でなくなった。とすれば、かれの仙女とのロマンスは、王迥のそれより少なくとも二十年以上後のこととなろう。しかし、王迥のロマンスから派生した余波とみて間違いない。

また、「芙蓉城」詩の発表によって、よりいっそう有名になった王迥は、「王照新志」にもいうごとく、この詩の第26句「蘼蘼形開如酒醒」はっと驚いて目を開き、体の感覚がもどったときは、まるで酔い醒めの心地だった、によって、名を蘼、字を子開、と改めた。その改名のかなり後の元祐二年（1087）、当時翰林学士として都開封に復歸していた蘇軾は朝請大夫か朝請郎だったろう王迥を新年の宴会に招き、詩を作って贈った。その詩は残念ながらのこっていないが、その詩にやはり開封にいて同席したかもしれぬ弟の蘇轍が次韻した「子瞻の王蘼朝請を招きて晩飲せしむるに次韻す」の律詩が「欒城集」巻一五に収められている。それをあげておこう。

矯矯公孫才不貧	矯矯たる公孫 才は貧ならず
白駒衝雪喜新春	白駒 雪を衝いて新春を喜ぶ
忽過銀闕迷歸路	忽ち銀闕を過ぎて歸路に迷い
誤認瑤臺尋故人	誤って瑤台を認めて故人を尋ね
訪我不嫌泥正滑	我れを訪ぬるに嫌わず 泥の正に滑たるを
留君深愧酒非醇	君を留めて深く愧ず 酒の醇に非ざるを



歸時九陌鋪寒月 歸りし時は九<sup>おおどおり</sup>陌<sup>し</sup>に寒月鋪き  
清絶空教僕御輦 清絶なるも空しく僕御を教<sup>し</sup>て輦<sup>しかめ</sup>しむ

さらに、その後だろうか、王迥が慣例よりは早く朝廷での官職を辞して、夫人の郷里たる江陰におもむこうとするとときに、蘇軾の弟子でいわゆる四学士の一人たる張耒（1054-1114）が三首の詩を作って送別した。「王子開朝散，早年に疾病を以て事を謝し，江陰に還る。詩を求めて別れを為す三首」（『張右史文集』卷一〇）と題する。「子開」は、「子高」から改めた字である。「朝散」は、おそらく従六品の朝散大夫だろうが、「王照新志」のいう「中散大夫」は従五品であり、中散はこの朝散の誤りかもしれない。いま、このうちの第3首をあげよう。

避禄免危疾 禄を避けて危疾を免れ  
棄鉛得黄金 鉛を棄てて黄金を得たり  
鬚眉藹如漆 鬚眉は藹として漆の如く  
便覺老難侵 便わち覚ゆ 老いの侵し難きを  
江湖足幽遁 江湖 幽遁するに足り  
市卒或可尋 市卒 或いは尋ぬ可し  
莫思芙蓉子 芙蓉子を思いて  
丹方亂君心 丹方 君が心を乱すこと莫かれ

第3・4句は、王迥が老人といえる年齢のわりには若わかしかったことを示し、最後の二句は、王迥がこの歳になってもまだ「芙蓉子」芙蓉城の仙女のことを忘れきれなかったらしいことを、裏面から示している。

また、同じく蘇軾の弟子で四学士の一人たる黄庭堅（1045-1105）も、熙寧八年（1075）、かれが北京、つまり大名府（いまの河北省大名県）の国子監教授の任にあったとき、王迥と詩のやりとりをしていた。かれの詩集には「子高の贈られし十韻に奉答す」「子高を招く二十二韻，兼ねて常甫・世弼に簡す」「子高の淵明伝を読むに次韻し謝す」（いずれも『山谷外集詩註』卷二），「子高の即事に次韻す」（『全宋詩』卷一〇二一）などが収められているが、明らかに仙女との交わりに言及した句は見あたらない。ただ、「十韻に奉答」した詩に「君は古人の風有り，詩は古人の作の如し。簞瓢 膏粱を謝し，翰墨 糟粕と化す」とうたうことからみると、王迥は養生につとめ、質素な生活をしていたようである。

そして、少しのち南宋と北から対峙した金の元好問（1190-1257）に「省掾の劉徳潤の家の驂鸞図に題し、並びに同舎郎の劉長卿の為に異を記す。劉は方城に在り。先に碧簫の遇有り，芙蓉城の事の如しと云う」と題する詩があり、それにはいう。

芙蓉城の出現（深澤）

千劫情縁萬古期　千劫の情縁　萬古の期  
樓中簫史姓名非　樓中の簫史　姓名は非なり  
洞天花落秋雲冷　洞天に花は落ち秋雲は冷やかなり  
腸斷青鸞獨自飛　腸斷えし青鸞は独自に飛ぶ

この詩は、「芙蓉城の事」が当時北方の金にまで伝わっており、しかもその余波のごとき「碧簫の遇」劉長卿と仙女との出会いが発生していたことをものがたっている。

ここで、やはり蘇軾の詩にまつわる奇妙な伝聞を一つ記しておこう。後の明の田汝成の「西湖遊覧志余」巻一五「方外玄蹤」には、いう。

王迥、字は子高、錢唐の人。豊儀は秀朗、清韻は人に逼り、飄飄然として時に出塵の想い有り。嘗つて仙女周瑤英に逢い、之を携えて同に芙蓉城に遊ぶ。宋の元豊の初め、蘇子瞻は子高に遇い、瑤英の事を詢ねれば、信に之有り。乃ち歌一篇を作り、并せて其の事を叙す。……子高の故居は、後に錢唐尉司と為る。而して北郭税務の側には片石有り、周益公題して「奇俊」と曰う、相い伝えて王子高の石と為すなり。

王迥が祖父王駿から趙州の人であることは明らかで、江陰ならともかく、「錢唐」つまりいまの浙江省杭州の人であると田がのべるのは、何の根拠もない。また、王迥が杭州に居住したという記載は、他の資料には見つからず、「故居」も「片石」もいまはやはり伝説としておくほうがよいだろう。

6

以上、胡微之の「伝」の断片、無名氏の「六么」の数句、蘇軾の「芙蓉城」詩と読んできて、王迥と仙女周瑤英のロマンスがどういうものだったかはだいたい明らかになったと思う。しかし、それに対しては、相反する二つの見方が存在する。たとえば、蘇軾、王銍などは事実だと主張する。そして、のちの明の江陰の人たる李詡も、郷里にゆかりの深い王迥に興味を持ち、その「戒庵老人漫筆」巻四「王子開の事」の条では、

余の邑は宋時に在りて王子開の事有り、甚はだ異なるも、人の知る者鮮し。余は諸書を衺め、併せて此に載せ、以て奇を捜す者の覽るを俟つ焉。

とのべたのち、主に事実だとみなせそうな資料ばかりを列举して、自からはコメントせず、

真偽の判定を読者にゆだねている。

それに対して、葉夢得などは、何かにかこつけた作り話だと主張する。そして、現代の研究着たる程毅中氏も「宋人伝奇拾零」（『文学遺産』1995年第1期）の「芙蓉城伝」の条で、以下のごとくのべる。

（王迥が）仙女に遇ったはなしは本来は他人がかこつけて作ったもので、元稹の「会真詩」と同様だったようだ。のちにまた「六么」の大曲に編まれて演唱され、それでとても広く流布したのである。蘇軾は王迥と親戚であり、その記事は最も信頼できるはずだが、しかし正に親戚であったために、ある事はおそらく「親者の為<sup>い</sup>に諱む」ということで談<sup>かた</sup>られなかったろうし、ある事はおそらく黄州で鬼を談<sup>かた</sup>ったときのように「姑<sup>しば</sup>らく<sup>みだ</sup>りに之を言う」ものだったろう。おそらくさらには王迥自身が捏造した作り話があって、他人の創作したはなしと一体になったのだろう。

以上、王迥のロマンスを事実とするもの、それを否定するもの、両者をあげてみた。さて、わたしは、王迥が現実のなかで周瑤英とつきあった部分は、社会に充満した濃密な道教の気分を媒介として王迥にもたらされた宗教的幻想だと考えている。ただ、「夢中」でなされた芙蓉城への訪問は、夢の中の「事実」としてよいのかもしれない。とにかく、それを示唆するものとして、ここではじめにあげた石延年のはなしを思いおこしてみよう。

「六一居士詩話」では、鬼仙となった石延年が亳州の挙子、つまり科挙の受験生の家に降臨して、かれをさそおうとした、とのべていたが、ではなぜ他の場所でなく、亳州だったのか。それは、この亳州が老子の生地と伝えられ、道教の至高神として「真元皇帝」もしくは「太上老君混元上徳皇帝」と称される老子をまつた太清宮があったからである。

北宋の三代目の皇帝真宗は、そのおくり名「真」からも明らかなごとく、最も道教を尊崇し、その治世たる咸平元年（998）から乾興元年（1022）の二十年あまりは、さかんに道観を建立したり、道士の待遇を改善したり、泰山など道教の聖地を参拝したりして道教の興隆に尽くした。その結果として、天書が降ったり、さまざまな瑞祥があらわれたり、元始天尊が降臨したりした。こうした真宗の重要な行事の一つが、太清宮への朝謁だった。

「宋史」真宗本紀によれば、大中祥符六年（1013）七月、亳州的官吏・父老三千三百人が朝廷におもむき、真宗に太清宮に朝謁するよう請願した。そこで、反対意見を押しきって、翌七年（1014）正月、真宗は天書を奉じつつ都開封を出発し、他の道観に参拝してから、太清宮に到着し朝謁した。そして亳州を集慶軍節度にランク・アップし、歳賦の十分の二を減じたのである。

もしも真宗の時代に醸成された、こうした亳州にまつわる道教的事実が、のちの石延年の鬼

仙を亳州に降臨させたとすれば、それは王迥の芙蓉城の出現にも同様の媒介作用をおよぼすだろう。そこでポイントとなるのは、石・丁・王迥のいずれの芙蓉城も仁宗の慶暦年間、とくに慶暦三年（1043）ごろに集中して出現したことである。仁宗は道教に対してそれほど熱心ではなかったが、しかしこの慶暦三年は真宗の治世から二十年ほどしかへだたっていない。この二十年は、真宗の興隆政策によってつちかわれた濃厚な道教の気分が社会に充満し浸透し、道教の共同幻想を生み出すうえでちょうどいい時間、つまり醸成期間だったのではなかろうか。この道教的気分を念頭におきつつ、「芙蓉城」について考えてみよう。

「芙蓉」は、はすの花をいうが、道教では重要な花とされ、そのかたちにとった「芙蓉巾」「芙蓉冠」などがある。紫微夫人の撰とされる「洞真太上太霄琅書」（「道蔵」正一部）巻四にはいう。

花、葉のりっぱなことは、芙蓉にまさるものはない。道教ではその意味あいを貴び、またその葉をかたどる。高下大小は、その人にあわせ、少ない髪でもちゃんとおさまり、縷を垂らす必要はない。まとめていうなら、「芙蓉巾」と名づけるのである。べつに芙蓉の冠があつて、周人は「委貌」といい、製<sup>つくり</sup>りはやや異なるが、体用はだいたい同じである。もともとは諸天の神がみや徳高い人の冠で、みな三素の紫雲、あるいは七色の霄霞、あるいは九光の精気を凝集して、自然に冠となったものである。

また、「雲笈七籤」巻八「三十九章経を积す」には、上元太素三元君のことばとして、

太素三元宮中には三華の気があり、自然より生じるものである。芙蓉の暉きに似ている。

とあり、同じく巻七七「真人駐年藕華方」には、不老長生の妙薬として、

藕の実、……一名蓮花、一名芙蓉、

などとある。

また、「金籙齋三洞讚詠儀」（「道蔵」洞真部讚頌類）巻下には、真宗とならんで北宋の道教のピークを形成した徽宗がさきの「积三十九章経」にもとづいてうたった「玉清楽」十首が収められているが、その第10首にはいう。

三華太素自然生	三華太素 自然に生じ
空裏芙蓉灼灼明	空裏に芙蓉は灼灼として明らかなり

絳室金房虚寶座      絳室金房 宝座虚しく  
大微童子下相迎      大微の童子は下りて相い迎う

また、晩唐の司空図が道士をうたった「道者を送る二首」、その第1首にはいう。

洞天眞侶昔曾逢      洞天の眞侶 昔し曾つて逢いし  
西嶽今居第幾峰      西嶽 今は第幾峰にか居る  
峰頂他時教我認      峰頂 他時 我れをして認めしむれば  
相招須把碧芙蓉      相い招くに須からく碧芙蓉を把るべし

また、ここで後の資料ではあるが、きわめて示唆に富む一文をあげてみよう。明の旅行家たる王士性の「五嶽遊草」巻四「入天台山志」の条に、天台山中の「寒巖」を描写している。

又た北行して転ずること五里余、始めて寒巖に至る。馬首に巖を望めば、<sup>まこ</sup>真とに天上の芙蓉十二城の如く、亦た黄牛峽を行くに彷彿たる也。寒巖は石壁の高きこと百丈にして屏の如く、洞敞にして数百人を容れ、夏至にも日影を見ず。一石の正方なるは、則ち寒山子の宴坐せし処也。

「寒巖」は、唐の仏僧寒山に由来するごとくだが、王士性は寒山を「仙」とみなしており、「寒巖」も道教の聖地とみなしていよう。この「寒巖」がたとえられた「天上芙蓉十二城」はまさしく道教の聖なる宮殿としての「芙蓉城」であり、それは明代では天上にあると考えられていたようである。

これらの引用からも、「芙蓉城」の道教における高貴な気分は充分に見てとれようが、しかし「芙蓉城」の「芙蓉」はじつは仏教の「蓮花」のイメージを裏に秘めているように思う。仏教においては、蓮池の清涼とその水面に咲く蓮花の美は、浄土経典をはじめとする大乘仏教の各経典において、とくに阿弥陀仏のいます西方の極楽浄土を形成する上で必須の要素である。たとえば、「大無量寿経」巻上では、極楽浄土には七宝の浴池があって八功德水が盈満し、「天の優鉢羅華・鉢曇摩華・拘物頭華・分陀利華」天の青蓮花・紅蓮花・黄蓮花・白蓮花・勝香蓮花などが、色とりどりに生い茂り、水面を覆いつくしている、とのべている。

こうした西方浄土、いわゆる仏国のイメージが、宋代になっても変わらずに保持されていたろうことは、主に宋の直前、唐代の資料たる敦煌写本によってもうかがえる。たとえば、中唐の法照の「浄土五会念仏誦経観行儀」巻下（ペリオ 2250 号、また 2963 号により、「大正蔵」巻八五に収める）に収める、極楽世界のありさまを讃えた「極楽連珠賛」にはいう。

芙蓉城の出現（深澤）

紅蓮生在寶花池	紅蓮は生じて宝花池に在り
千光萬色不思議	千光万色 不思議なり
水鳥珠林同國土	水鳥 珠林 国土を同じゅうし
異香音樂每相隨	異香 音樂 毎に相い隨う

また、同じく敦煌の願文たる「亡妣文」（スタイン 343 号、ペリオ 2915 号）にも、

斯の勝福、限り莫き良縁に考み、先ず用<sup>も</sup>って亡靈の去識に奉資す。唯だ願わくは白毫が引道して、一念にして梵天に昇り、紅蓮が化生して、刹那にして仏国に遊ばんことを。

とある。ここで「紅蓮」とからむ「国土」「仏国」は、「芙蓉城」のイメージの形成にいくらかは貢献しているだろう。

また、同じく敦煌から出た「浄名経関中疏」（スタイン 3475 号）の巻上、大曆七年（772）の年号をしるしたあとがきには、

願わくは秘藏常に開きて、広く真如の理<sup>ひろ</sup>を市め、蓮宮永しえに麗わしくして、弘く般若の源を分かつたんことを。

とあるが、ここの「蓮宮」は、「芙蓉城」により近かろう。

7

「芙蓉城」を考えるうえで、さらに注目すべきは、蘇軾の詩の第 13 句「緱山を過ぎて帝廷に朝するに因り」である。「緱山」は、緱氏山ともいい、いまの河南省偃氏県の南、都開封からは真西にあたる。「雲笈七籤」巻一一五「壺城集仙録」の「緱仙姑」の条（「太平広記」巻七〇にも引く）には、「西王母の姓は緱」、また「河南の緱氏は、乃ち王母の道を修めし処、故郷の山なり」とのべている。つまり、「緱山」は、西王母を暗示しているのである。そして、周瑤英は西王母の配下の女仙だったかもしれない。

また、明代にそれ以前の諸宮調をまとめた歌曲集「雍熙楽府」巻一三「越調・鬪鶴鵒」の妓女を詠じた「秃厮兒」曲にはいう、

席兒前眉尖眼角	席兒の前では眉は尖り眼は角ばり
寒兒中口強心嬌	寒兒 <sup>くるわ</sup> の中では口は強く心は嬌なり

謝瓊姬不嫌王子高	謝瓊姬は王子高を嫌わず
同跨鳳	共に鳳に跨り
宴蟠桃	蟠桃もて宴し
吹簫	簫を吹く

「謝瓊姬」は、周瓊姬の後世における訛誤だろう。ここで注目すべきは、「宴蟠桃」で、これは明らかに西王母が宮中の宴で漢の武帝に「蟠桃」をすすめた故事にもとづいている。つまり、西王母は芙蓉城とからむのである。

そこで、「雲笈七籤」巻一一四「墉城集仙録」の「西王母伝」（「太平広記」巻五六にも引く）をみると、関連する記述がみられる。以下に、その部分をあげてみよう。

西王母とは、九靈太妙龜山金母である。……また西華至妙の気が、化して金母を生んだ。金母は神洲の伊川に生まれた。その姓は緱氏である。生まれたとたん飛翔し、陰霊の気を主どり、西方をおさめ、王母ともいう。……天上天下、三界十方、女子の登仙・得道した者は、すべて王母に従属するのである。その住まう宮闕は、龜山の春山西那の都、崑崙の圃、閭風の苑にある。千重もの金城、十二の玉楼、瓊華の宮闕、碧くかがやく堂、九層の玄台、紫翠の丹房があり、左は瑤池を帯び、右は翠水をめぐらしている。その山の下は、弱水が九重にとりまき、大波は万丈もの高さ、鸞車羽輪でなければ到ることができない。いわゆる「玉闕は天に聳<sup>いた</sup>り、緑台は霄を承く」である。……<sup>きざはし</sup>軒砌の下には、白環の樹、丹剛の林(?)を植え、空青は万条もの多さ、瑤幹は千尋もの高さ。風もないのに妙なるしらべがおのずと響き、その音色はすべて九奏八会の音である。

「天上天下、三界十方、女子の登仙得道せる者は咸<sup>みな</sup>隸する所なり」は、「伝」の(7)にあられた百人あまりの美女、詩の第4句「雲舒霞卷千傳停」赤い雲がたなびき、夕焼けが巻きこむところ、なよやかな千人もの美女、の描写のごとく、芙蓉城では城主以外はすべてかれに従属する女仙らしい、といった状況に、ぴったり対応する。

また、その宮闕のさまは、「伝」の(7)の「珍禽佳木、清流怪石、殿閣は金碧がたがいに照りはえてい」、またそびえたつ「楼」や「殿廷」のさま、詩の第22句「玉楼浮空聳亭亭」白玉の楼が空に浮かびあがり、高々とそびえたつ、などとまさしく対応している。

しかし、この「西王母伝」の記述は、おそらくは漢の東方朔の撰とされる「十洲記」にもとづいているだろう。「雲笈七籤」巻二六に引く「十洲記」の「三島」、これは本来東方の海上にある三つの仙島の記述だが、「方丈」「蓬丘」とセットになるものとして「崑崙」がある。これは、東方の海上の芙蓉城と、西方とされていた西王母の崑崙をつなぐ接点として、きわめて重

要である。その「崑崙山」の「三角」をのべた部分をあげよう。

其の一角は正東にして、崑崙宮と名づく。其の一角は金を積みて天墉城と為す有り、面は方千里、城上には金台五所、玉楼十二所を安く。其の北戸山、承淵山より入れば、墉城有り、金台玉楼相い映じ、……の如し。流精の闕、光碧の堂、瓊華の室、紫翠丹房は、景雲燭日、朱霞九光、西王母の治する所也。

さきに引いた「西王母伝」と対照すれば、その類似はきわめて明らかである。

つぎは、蘇軾詩の同じく第13句の「帝廷に朝す」を検討しよう。この「帝」は、いったい誰なのか。少なくとも、これは「伝」の（6）で周瑤英が朝列の答えとして「帝にお目通りするのです」とのべた「帝」であり、王銍の「黙記」で晏殊が「其の人の名は帝所に在り、果たしてしかるか否か」とたずね、「試しに帝所に<sup>て</sup>いて早晩の期と、後來皇子が還た定むを得るや否やとを問え」とたのんだ「帝所」の「帝」と同一だろう。そして、「伝」の（6）での「帝に朝す」が「朝列に預る」ことで、その「朝列」はおそらく「伝」の（7）の「女人の道服を着て出てくるものが百人あまり、殿前の広場に立った。まもなく、殿上の御簾が巻きあげられ、美男子がひとり朝服を着てひじかけによりかかっていた。そして広場の女たちは順番に一人ずつ殿上にあがっていった。」の記述と対応するとすれば、この「帝」は、すなわち芙蓉城の主に他ならない。

では、なぜ本来西王母の亀山の宮廷をイメージした芙蓉城で、その主が女性である西王母でなく、「帝」つまり男性の最高神になったのか。それを解く鍵は、やはり真宗にある。

さきにも引いた「金鑑斎三洞讃詠儀」巻中には、真宗の「又散花詞」十首を収める。ちなみに、道教の儀礼の歌は、さきの徽宗の「玉清楽」、また歩虚詞など、おおむね十首を一組とする。それはともかく、この「又散花詞」の第2首は、次のごとくである。

崑丘絶頂有龜臺	崑丘の絶頂に亀台有り
臺上奇花四序開	台上 奇花は四序に開く
不是群仙朝玉帝	是れ群仙の玉帝に朝するにあらずんば
何由散到世間來	何に由りてか散じて世間に到り來たらん

「亀台」は、もちろん亀山金母たる西王母の居処である。第2句の、台上ではめずらしい花が一年中咲いている、は、蘇軾詩の第1句「芙蓉城中花冥冥」と相い通じるだろう。そして、注目すべきは、第3句である。当然西王母であるべきはずの、群仙が朝する対象が、「玉帝」となっている。つまり、ここにも西王母から男性神「玉帝」への転換があり、「玉帝」こそは、



芙蓉城の主であり、「帝」だったのである。

「玉帝」は、「玉皇大帝」「玉皇上帝」などともよばれ、「玉皇」ともよばれる、道教の最高神で、早くは梁の陶弘景の「真靈位業図」の「玉清三元宮」内の序列「上第一右位」に「玉皇道君」「高上玉帝」としてみえる。もちろん、真宗はこの上なく尊崇していた。そのことは、真宗みずからが撰した、天地の道教神への祈禱、感謝の祝詞を収めた「玉京集」（「道蔵」洞真部表奏類）のほとんどすべての奏文が、まず「玉皇」にたてまつられていることから明らかである。

また、「宋史」真宗本紀などによれば、大中祥符五年（1012）十一月、真宗は「親しく玉皇を朝元殿に祀」り、七年（1014）九月、滋福殿に玉皇の像をおき、聖号の箱を奉じ、朝元殿のうしろ天書のあるとばりに奉安し、また八年（1015）正月一日には、玉清昭応宮に朝謁し、表を奉じて玉皇大帝に「太上開天執符御曆含真体道玉皇大帝」という聖号をたてまつり、玉に刻んだ天書を宝符閣に奉安した。そして、各地に多くの玉皇廟・玉皇觀を建てたのである。

「玉帝」の宋代における神格をよく説明するのは、唐から宋にかけて成立したとされる「高上玉皇本行集経」（「道蔵」洞真部本文類）である。いまは、芙蓉城に関係するとおもわれる部分を巻上「清微天宮神通品」からあげてみよう。

爾の時、玉皇は即ち其の身を分かちて十方の諸大天宮<sup>あまね</sup>に徧く、諸天宮をして自然に白玉を京と為し、黄金を闕と為し、七宝玄苑、大光明殿、光明の座を具え、幢節幡蓋、異宝奇花は、徧<sup>あらゆるところ</sup>く是<sup>し</sup>処に布くことを化現せしむ。

爾の時、玉皇は即ち分くる所の身を以て是<sup>あまね</sup>処に徧く、白玉京中、黄金闕内、七宝玄苑、大光明殿、光明座上<sup>あまね</sup>、普く十方の為に清浄解脱の道を演説す。

時に玉帝に化し、各おの無量の天真大聖、妙行真人、靈妃玉女を以て左右に侍列せしむ。是の諸玉女は、顔容姝妙、端麗奇特にして、天珍異宝もて、身相を莊嚴し、言音は清徹にして、衆の聞<sup>ねが</sup>くを樂う所なり。是の諸玉女は、其の身より復た微妙解脱自然の香を出だす。是の香は芬馥として、諸天の極妙樂土、及び諸大地の一切の福処に周徧す。

「玉皇」は「化」して「玉帝」になるのだから、同一の神格とみなしてよい。そして、玉皇の分身がおさめる諸天宮がやはり「芙蓉城」のイメージに通ずることは、「異宝奇花は、徧く是処に布く」や「大光明殿に、光明の座を具え」などから見てとれよう。さらに、「顔容は姝妙、端麗奇特」にして、「芬馥」たる香を身体から発散する「玉女」たちは、「伝」の（3）で靈妙な残り香をただよわせる周瑤英をはじめとする「傳停」たる美女たちに通じるだろう。

なお、この「高上玉皇本行集経」巻中「太上天光明円満大神呪品」には、「是ここに於いて元始天尊は几を撫して高く抗し、真を凝らして遐かに想う」とあり、巻下「報応神驗品」には、

「是の時に於けるや、太真は几に御し、王妃は筵を払い、万神は班列し、諸天は軒に臨む」とあり、「伝」の（7）で「須臾にして殿上に簾卷かれ、美丈夫一人有り、朝服にして几に憑る」と描写される芙蓉城主が、元始天尊と同様の最高神たる「玉帝」である可能性をさらに補強するだろう。

さらに、芙蓉城主が「朝服」であることは、元の秦子晋の「新編連相搜神広記」、それを明代に踏襲したらしい「絵図三教源流搜神大全」のいずれにも神仙のトップとしてのせる「玉皇上帝」の肖像が、地上の天子のごとく、端正なかおだちで九章の法服を身につけ、頭には冕旒をたらしした珠冠をかぶり、手には玉籙をもっていることと、ぴったり対応する。（後図参照）おそらく、宋代における玉帝のイメージも、後世とそれほど異なりはしなかったろう。

さて、ここで玉帝と芙蓉城主をつなぐもう一つの資料をあげておこう。それは、唐の白居易の「仙を夢む詩」である。その前半をあげれば、

人有夢仙者	人に仙を夢みし者有り
夢身升上清	夢に身は上清に升り
坐乗一白鶴	一わの白鶴に坐乗し
前引雙紅旌	双つの紅旌もて前引せしむ
羽衣忽飄飄	羽衣は忽ち飄飄
玉鸞俄錚錚	玉鸞は俄かに錚錚
半空直下視	半空より直に下視せば
人世塵冥冥	人世は塵冥冥たり
漸失郷國處	漸く郷国の處を失し
纔分山水形	纔かに山水の形を分かつ
東海一片白	東海是一片白く
列岳五點青	列岳は五点青し
須臾群仙來	須臾にして群仙來たり
相引朝玉京	相い引きて玉京に朝す
安期羨門輩	安期・羨門の輩は
列侍如公卿	列侍すること公卿の如し
仰謁玉皇帝	仰いで玉皇帝に謁し
稽首前致誠	稽首して前 <sup>すす</sup> みて誠を致す
帝言汝仙才	帝は言う「汝は仙才なり
努力勿自輕	努力して自から輕 <sup>のち</sup> んずる勿かれ
却後十五年	却 <sup>のち</sup> 後 十五年

期汝不死庭　汝と不死の庭に期せん」と  
再拜受斯言　再拜して斯の言を受け  
既寤喜且驚　既に寤めては喜び且つ驚く

詩の後半は、のちの神仏修行にもかかわらずこの人が老いて死んだことをのべて、「悲しい哉仙を夢みし人、一夢にして一生を誤る」と諷刺をこめて結ばれる。それにしても、この記述は、「伝」(7)の「夢中」で王迥が周瑤英と空中飛行して芙蓉城にいたった描写と、また蘇軾詩の第20句あたり、夢の中で、仙女とつれだって鳳凰のつばさに乗り、たちまちの間に万里の空を電光のスピードで越えゆく、といった状況と、なんと似かよっていることか。しかも、到着した天宮で朝謁するのは、「玉皇帝」、つまり玉帝なのである。白居易のこの詩が、当時じっさいに世間にひろまっているうわさをもとにして作られたとすれば、それは宋代にも伝わっていた可能性は十分にある。

さらに、白の友人たる唐の元稹の「州宅を以て楽天に<sup>ほこ</sup>誇る」詩には、

我是玉皇香案吏　我れは是れ玉皇香案の吏  
謫居猶得住蓬萊　謫居するも猶お蓬萊に住むを得たり

とある。これは「蓬萊」になぞらえた越州に左遷された元稹の、おのれの住居を自慢したたわむれの句で、「玉皇」は当時の皇帝をさすが、「玉皇」が「香案」と結びつくのは、蘇軾詩の第3句「珠簾玉案翡翠屏」に根拠を与えるかもしれない。

8

以上のべきたったごとく、「芙蓉城」は西王母の宮闕、それを転換した「帝」つまり「玉皇上帝」の宮闕を媒介としてイメージされた、と考えてよいだろう。そこの「主」は、玉帝ということになる。しかし、それでは、芙蓉城の主と明言されていた石延年と丁度はどうなるのか。ここで考えるべきは、王迥のロマンスの発生と、石・丁の城主就任の時間である。

さきにのべたように、王迥のロマンスは「黙記」の記述から考えると、慶暦三年(1043)ごろになる。ところで、石延年が死んだのは、慶暦元年(1041)、その後に芙蓉城主になったのだから、王迥のロマンスに、美丈夫の城主として登場する可能性は充分ある。しかしかれは、仙としては身分の低い「鬼仙」で、玉帝とはあまりにもかけはなれている。その点だけがどうしてもすっきりしない。そして、王迥のロマンスがおそらく自己の内にきざした幻想と思われるのに対して、石のエピソードは石ではなく他者に生じた幻想である。これは芙蓉城をめぐる

幻想が多く要素の混合であることを示しているのかもしれない。

丁度も、他者による幻想という点では同様である。かれが死んだのは、慶暦のあとの皇祐五年（1053）で、もし石と同じく死後に正式に主となったとすれば、明らかに王迥より後になるが、エピソードのように慶暦中、生前に主となったとすれば、王迥のロマンスと同時になりうる。

石・丁のいずれも王迥のロマンスに登場してよいことは、玉帝とのかかわりはともかく、いちおう明らかになった。しかしより大きな障害となる問題がある。それは、北宋の孔平仲が熙寧五年（1072）ごろに作った「王子高殿丞に呈す」（『清江三孔集』巻二四）なる詩の存在である。王迥が「子高」と字し、「殿丞」殿中丞、つまり殿中省の丞、従七品であったことから明らかなように、蘇軾の「芙蓉城」より以前に作られたものである。それには、いう。

天上人間事不同	天上 人間 事同じからず
相思何日却相逢	相い思うも何れの日にか却って相い逢わん
芙蓉城在蓬萊外	芙蓉城は蓬萊 <sup>かなた</sup> の外に在り
海濶波深千萬重	海濶く波深きこと千万重

この詩では、孔平仲は明らかに、芙蓉城の位置を東海上にある仙境蓬萊のさらに東方とみている。

そして、「伝」の（7）で周瑤英がつれてきた一人の女にからむ「三山の事」は、おそらく東海上に浮かぶ蓬萊・方丈・瀛洲の三仙境にまつわる事にちがいない。

ところが、西王母の居住する亀山、そして玉帝もいる崑崙山の亀台は、中国のはるか西方の辺境に位置する。しかも、「芙蓉」とからむ仏教の極楽浄土も、まさに西方にある。もし芙蓉城がはるか東方にあるとすれば、この西のはてから東のはてへの転換をどう説明すればよいのか。この点については、さきに引いた「十洲記」で「崑崙山」が「三島」のはじめにあげられていたことが、きわめて重要なヒントになるが、ここで、西王母、玉帝につづく第三の媒介を設定してもよからう。それは、西王母のパートナーにして、玉皇とも関係する東王父、別名木公、のちの東華帝君である。いま、「太平広記」巻一に「仙伝拾遺に出づ」として引く「木公」から関係する部分をあげる。

木公、東王父ともいい、東王公ともいう。おもうに青陽の天気、百物の先がけである。三維の冠をかぶり、九色雲霞の服を着ている。玉皇君とも号す。雲房の間にすまいし、紫雲を蓋とし、青雲を城とする。仙童がわきで侍立し、玉女が香を散じている。真人や仙人の官僚は、億万でかぞえるほど。おのおのが官職をもち、みな木公の命令にしたがって、朝

奉翼賛する。だから男女の得道者は、その名前がここに登録されているのである。……あるものがいうには、東のはての大荒の中にすんでいる。山がある。青玉で部屋をつくり、深く広いこと数里、仙官が真仙を推薦するときに拝謁にいく。九靈金母（西王母）は一年に二回その宮殿にいき、いっしょに男女の真仙の品階、功行を評定し、そのランクを上げたり下げたりする。そのランク付けされた名簿をまとめると、元始天尊に上奏し、玉晨君の中だちで、太上老君に拝命する。天地の変遷、陰陽の代謝、運による興廃、陽九百六、善を挙げ悪をしりぞけること、すべてこの名簿によるのである。

木公は、「玉皇君」とも号し、東のはての大荒中に住まいする。そして、東方の色たる青陽の元気の象徴ゆえに、「青雲」を城とする。これは「伝」の（８）にいう東廂の楼上の扁額の「碧雲」の意味を、まさしく指し示している。「碧雲」つまり東方を示す「青雲」のかたちづくりの城こそ、「芙蓉城」だったのである。また「伝」の（７）で朝列した広場の女たちが順番に一人ずつ殿上に上がっていったのは、芙蓉城主による「女」の真仙の品階・功行の評定を受けていたのだろう。

さらに、さきにもあげた「新編連相搜神広記」などの「東華帝君」の条には、次のごとくいう。

紫府なる者は、帝君が功行を校するの所。夫れ海内には三島有りて十州は其の中に列す。上島の三洲は、蓬萊・方丈・瀛州を謂うなり。中島の三洲は芙蓉・閼苑・瑤池を謂うなり。下島の三洲は、赤城・玄閼・桃源を謂うなり。三島九洲は洪濛の中に鼎峙す。又た洲有りて紫府と曰い、三島の間に踞す。乃ち帝君の別理。

木公の後身たる東華帝君が女仙たちを評定する宮廷「紫府」は、東海上の三島にあるが、その中島の三洲の一つは「芙蓉」と名づけられているのだ。しかも本来西方にあるべき「閼苑」「瑤池」とならべられており、ここには西方から東方へのはっきりした転換がある。これによって、「芙蓉城」のはるか東海上の位置は確定した、といってよい。

9

最後に、この王廻と周瑤英のロマンスには梁の陶弘景が神仙のお告げを編集した道教の根本経典「真誥」の気配が色濃くただよっていることを指摘しておきたい。

まず、周が王のもとにやってきたのは、「伝」の（２）に明らかなごとく、前世の宿債によるもので、蘇軾の詩では、重要経典の「黄庭経」を誤読したためと補足する。つまり、その罪

過を償うために百日あまりも毎夕王廻のもとをおとづれたのである。このような状況の原型、仙女が罪過を償うために俗界の男性のもとに降臨するというパターンは、「真誥」巻一、冒頭の「愕緑華」にある。そのはなしをかいつまんで引こう。

愕緑華というのは、自分では南山の人というが、どこの山だかわからない。女性で、年は二十歳ほど、上下ともに青い衣裳をつけ、顔立ちはみごとに整っていた。升平三年（359）の十一月十日の夜に羊権のもとに降った。それ以後、しばしばやって来て、一か月のうちに六度も訪れた。もともとの姓は楊であると言い、権に詩一篇を贈り、また火浣布の手巾一枚と、金と玉の条脱<sup>うでわ</sup>それぞれ一つを与えた。条脱は、肉が厚くて特別に精巧なものだった。神女は権に語った、「あなたは、くれぐれもわたくしのことを人に漏らしてはなりません。わたくしのことを漏らせば、もろともに罪せられることになりましょう。」と。この神女のことをただしてみたところ、次のようだった、「彼女は九嶷山中にあって道を得た女性の羅郁です。過去世で、師母のために妊産婦を毒殺したことがあって、玄洲の役所では、以前の罪が消えていないことから、臭濁の世界に流して、その罪過を償なわせたのです。羊権に尸解のための薬を与えました。今は湘東山におります。彼女はもう九百歳にもなります。」

愕緑華、のちの萼緑華を周瑤英に、羊権を王廻に、妊産婦の毒殺を「黄庭経」の誤読に入れかえれば、この「真誥」はそのまま芙蓉城のロマンスになる。そして、愕緑華が羊権に「詩一篇」と「尸解のための薬」を贈ったのに対して、周瑤英は別れにのぞんで「詩」も「神丹」も王廻に贈っているのである。

また、蘇軾が王廻の告白をうけて作った「芙蓉城」詩、その第7句「往来三世空鍊形」の「鍊形」も「真誥」に頻出するもので、巻四には次のごとくいう。

もし人がしばらく死後に太陰に行き、かりに三官に立ち寄れば、肉体はぼろぼろに腐爛し、血液は流れなくなり、脈はなくなっている、五臓は自然に生きており、白骨は玉のようであり、七魄は側にいて活動を続け、三魂はその場所を守り、三元の神がしばらく休息して、太神が内に閉じこもる。三十年か二十年たつと、あるいは十年か三年たつと、自由に出て来て、生まれる時にはあらためて血を吸収して肉を育成し、津液がつくられて肉体が再生する。それは昔の死ぬ前の姿より遙かにりっぱである。真人は太陰で鍊形（肉体を鍊成）し、三官で姿を変えるというのは、このことである。

また、第10句「無復白日乗雲輶」の「雲輶」雲の車も頻出語で、「真誥」巻一には、

真旌は必ず尅<sup>く</sup>往く可く、雲輶<sup>うんぎ</sup>は必ず俱に駕する可きなり。

とあり、卷二には、

終には能く雲輶を策し以って霄に赴き、司命の丹録<sup>のろ</sup>に書する耳。

などとある。

また、第 23 句「天書雲篆誰所銘」は、まったく「真誥」卷一の紫微王夫人の言葉にもとづく。

文字が作られたそもそもの初めたるや、五色が初めてきざし、美しいあやが描き定められた時、人びとの間の関係が際立ち、陰陽の別がきまると、三元・八会・群方・飛天の書が出現し、さらに、八竜・雲篆・明光の章が現れました。……今、三元・八会の書は皇上太極高真清仙が用いているものです。雲篆・明光の章は、今日にする神靈符書の字がそれです。

また、第 25 句「仙風鏘然韻流鈴」の「流鈴」魔よけの鈴は、「真誥」卷九、夜寝ていて目がさめた時の呪文にいう。

当に摧<sup>くだ</sup>くに流鈴を以ってすべし。万凶は消滅し、願う所は必ず成らん。

この「流鈴」は、やはり「真誥」に頻出する「流金の鈴」に同じい。卷二には、司命東卿君降臨のおり、おつきの者の一人が「流金の鈴を手握っている」、卷三には、東宮靈照夫人が「神虎の符を帯び、流金の鈴を握り」、卷五には、「仙道に流金の鈴有りて、以って鬼神を攝す」などとある。

さて、ここで、北宋での芙蓉城の出現についてまとめるとすれば、それは、少し前にその治世をおえた真宗の濃厚な道教の気分のもと、西王母、玉帝、東王父といった神仙を媒介として、さらには「真誥」や仏教の西方浄土をも加味して、王廻という個人のなかにもたらされた宗教的幻想だろう。ただ、王廻は建前として儒教を奉ずる高級官僚の御曹子であり、道教に対する傾倒がどれほどのものだったのかは、不明である。

また、別系統のうわさで、芙蓉城主として迎えられたのが、なぜ石延年であり、丁度であったのかは、よくわからない。かれらのどちらからも、明白な道教信仰などは見出せないからである。しかし、それらの疑問は、今後の課題として残しておくことにしよう。



玉皇上帝図－搜神広記



玉皇上帝図－搜神大全

(1997・9・23)